

# 乳幼児親子との交流と学生の学び — 保育内容「人間関係」の授業実践 —

倉 畑 萌<sup>1)</sup>

## What Students Learn from Interactions with Parents and Children — A Course in “Human Relationship” —

Moe KURAHATA

本実践では、保育を志す学生が保護者と子どもとの関係を築くことを実践的に学ぶ場として「保育内容『人間関係』」の授業の中で、乳幼児親子との交流を行った。同一親子との交流をグループごとで行う中で、計画・実践・振り返りを繰り返しながら全3回の交流を進めていった。普段知ることのない家庭での親子の様子について理解することや保護者の思いを聞くことができたことによって学生の保護者理解への意識が高まったと言える。また、継続的な関わりによって子ども理解を深めることにつながった。さらに保育者としての自分自身の在り方について振り返る機会にもなったことから、保育実践力の養成にとって親子との直接的な関わりの場が重要であることが改めて示された。

キーワード：保護者理解・子ども理解・学生・交流・保育者

### 1. 目的

領域「人間関係」は、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかわる力を養う。」ことを目的としている（幼稚園教育要領：2018, 保育所保育指針：2018, 幼保連携型認定子ども園教育・保育要領：2018）。園生活の中では、保育者と子どもとの信頼関係が基盤となって子どもが成長していくことを考えると、保育を志す学生が実際に子どもとの関係を築く経験をすることは重要であるといえる。保育者にとっての人間関係とは、対子どもだけでなく、保護者・同僚・地域の方々など多岐に渡る。実際に保護者との関係について「保育所保育指針」では、乳児保育の「保育の実施に関わる重要事項」において、「保護者との信頼関係を築きながら保育を進めるとともに、保護者からの相談に応じ、保護者への支援に努めていくこと」と述べられている。さらに第4章には子育て支援の

項目も設けられており、子どもとの関係だけでなく、在園児の保護者及び地域の保護者との関係を築き、支援していくことが重要となっている。

実際の子育て家庭の様子について考えると、子供・若者白書（2019）の中では、「少子化や核家族の進行、地域のつながりの希薄化など、社会環境が変化する中で、身近な地域に相談できる相手がいないなど、子育てが孤立化することにより、その負担感が増大している。とりわけ、3歳未満の子どもを持つ女性の約6～7割は家庭で育児をしており、社会からの孤立感や疎外感を持つものも少なくない」としている。保育所指針等の改訂にあたって、保育現場が子育て支援の場として機能することがより求められたがそれと同時に保育者にも子育て支援力が求められている。そのためには、学生時代から保護者についての理解を深める必要があると言える。

しかしながら、橘・小原（2014）では、養成段階で子育て支援活動への参加経験者は約4割であり学

1) 短期大学部幼児教育学科

生が保育者として現場に出る前に保護者との関わりを持つことの少なさが示された。このような現代社会の状況を鑑みて、吉田・長櫓(2017)では、「保育と子育て支援」の授業の一環として乳幼児期の親子への子育て支援活動を学生主体で実施している。また、藤井・高田・雲津・秀・栗田(2018)では、出前講座として学生主体となって乳幼児の親子に対するふれあい遊び等の提供をするとともに学生の教育も行っている。矢萩(2014)では、子育て支援と保育実践力の養成という両面から保育実践を行っている。その中で学生は、主体的に保育を引き受け実践するという大変さがある一方で、だからこそ得られる子どもとの関わりや子どもの姿の変化から感じる手応えがあることに意義があったことを示唆している。このように乳幼児親子との関わりは、子育て支援という側面だけでなく学生の保育実践力の養成といった側面も持ち合わせているのである。

学生は実習において実践的な力を身につけることができるといえよう。しかしながら、様々な年齢の子どもと関わるのが可能であるものの保護者との接点はほとんど見られない。中平・馬場・高橋(2014)では、保育士としての経験年数が短いほど保護者対応に苦手意識を持っていることを示している。学生時代に保護者との関わりがないにも関わらず保育現場で働き始めるとすぐに保護者対応を求められることが苦手意識へとつながっていると推測される。そのため、和田(2017)では、保護者との交流に重点を置き、子ども理解と保護者理解をねらいとして保護者から話を伺うという交流会を実施している。そして、直接保護者から話を聞くことによって保護者の思いを理解し、子育て支援の必要性を理解ができ、保育者としての在り方について考える機会となったとしている。

子育て支援という観点から親子との交流の場を設けることが多いが、本実践においては、第一に保育実践力の養成を目的として「保育内容『人間関係』」の授業の一環の中で、乳幼児親子との交流会を開催することとした。実際に保護者と関わることで、保護者の思いや家庭での子どもの姿について理解することができる。保護者との関わりが少ない学生にとっては保護者との関係を築く経験をするのが重要であると考えた。また、全ての学生が実習において未満児と関わることはできないとは限らない。その

ため、未満児の子どもについて注意深く観察し、子どもの発達や興味・関心についての理解を深める中で、保育者としての関わり方・関係の築き方を学ぶことを目的とした。真下・張・中村(2010)では、幼児教育学科の学生を対象とした調査において、「保護者対応についてのみならず、学生自身の日常においても、最初の関係作りや能動的に働きかけることに対して苦手意識をもつ学生が少なくないことが明らかになった」としている。そういった学生の実態を踏まえると乳幼児親子と関わる経験が、「人間関係」つまり人と関わる力の実践の学びの場となり、保護者や子どもに共感し寄り添うことができる保育者としての資質を高めることにつながるであろう。そのような関わりを積み重ねが子育て支援力へと結びつくと考える。そのためのきっかけとしてまずは学生自身が人と出会い、継続的に関わることで人と関係を築く経験をすることができる場を設けることとした。

さらに、実際に交流会に参加した学生にとって本実践がどのような意味があったのかをアンケート調査を用いて検討することとした。

## 2. 授業実践

### 1) 交流会について

クラスが2つに分かれている関係で、A日程とB日程とで分かれて交流会を実施した。

#### ①日程

A日程：5月14日、6月11日、7月2日

B日程：5月21日、6月18日、7月9日

#### ②参加学生

保育内容「人間関係」の授業の受講学生、全93名(そのうち、A日程：44名、B日程：49名)

#### ③交流会参加の乳幼児親子

A日程：10組

申し込み時(4月)の子どもの月齢

レンジ：0歳4ヶ月～3歳0ヶ月

B日程：8組

申し込み時(4月)の子どもの月齢

レンジ：0歳7ヶ月～2歳7ヶ月

## 2) 実践の流れ

「保育内容（人間関係）」の授業の中で、7～9名の学生が1グループとなり、1・2組の乳幼児親子との50分間の交流会の場を3回設けた。1回目の交流会では担当教員が全ての乳幼児親子を対象として、30分間の模擬保育を行った（表1）。その際、スカーフを使用した「わらべうた」での活動を取り入れるなど親子で参加できることを意識した内容にすることで、学生達が今後交流会を進めるにあたっての参考になることを心がけた。模擬保育の間、学生達は子どもや保護者の様子、保育者（担当教員）の関わり方について観察し記録した。観察と記録の時間は、普段乳幼児親子と直接関わることがない学生達が、実際に親子が遊んでいる姿を見ることで親子について客観的に理解できるように設けた。また、2回目の交流会での学生達の遊びの提供の仕方に生かすことができるように記録をとりグループ内での計画の際に使用した。その後の20分間は各グループに分かれグループ全員で親子との交流を行い、子どもと玩具を使用しながら遊ぶ時間や保護者へ質問をする時間とした。

第2回目の交流会では交流するメンバー（3～4名）と学生が親子と交流している様子を観察するメンバー（3～4名）とに分かれて実施した。35分間はグループごとで、保護者への質問や子どもと触れ合う中で交流を進めた。観察するメンバーは、交流

するメンバーと親子とが関わる様子を近くで観察しながら学生や親子の言動を記録した。最後の15分間を合同タイムとして3グループが、全乳幼児親子を対象として、『手遊び』『絵本の読み聞かせ』『触れ合い遊び』といった遊びのいずれかの提供を行った（表2）。

第3回目の交流会では、グループごとで手作りおもちゃを作成し、そのおもちゃを用いながら交流会に臨んだ。2回目と3回目とは観察メンバーと交流メンバーとを交代して望んだ。また3回目も同様に合同タイムを実施した。

交流会の前にはグループごとで交流会に向けての計画を行った。交流会後には実際に交流したメンバーと観察したメンバーの双方が意見を出し合うことで、親子への理解について深めていった。また『保育者（学生）の関わり方』として姿勢や言葉の掛け方等にも着目しながら次回の交流会への改善点を探っていった。35分間の交流の時間をどのように過ごすのかについても指導案を作成する要領で計画を行った。

1回目の交流に向けての計画時には、交流相手の月齢から発達を推測し、交流の際に使用する玩具をグループごとでいくつか選択した。2回目は、第1回目での交流会での子どもの様子、保護者の話を参考にしながら玩具を選択していくなど、使用する材料をグループごとで反省・計画の中で決めていった。

表1 第1回目交流会 活動内容

1回目交流会（A・B日程） 担当教員が遊びを提供	
わらべうた	「うえからしたから」「にぎりぱっちり」
絵本	「いないいないばあ」
ふれあい遊び	バスに乗って

表2 合同タイムでの実施内容

	2回目交流会 （A日程）	3回目交流会 （A日程）	2回目交流会 （B日程）	3回目交流会 （B日程）
手遊び	はじまるよ	トントントンアンパンマン	トントントンアンパンマン	トントントンひげじいさん
絵本	だるまさんが	びよーん	きんぎょがにげた	びよーん
ふれあい遊び	いっぽんばしこちょこちょ	くっついた	ぺんぎんさんのやまのぼり	おんまはみんな



3回目の交流会では手作りおもちゃを使用したのだが、2回の交流会を通して見えてきた子どもの姿や保護者からの情報から各グループがそれぞれの子どもに合った玩具を考え作成した。

例えば、あるグループは、1歳の子どもの交流であったことから、『音の鳴るおもちゃ』を準備して第1回目の交流会に臨んだ。交流会の中で、子どもが「音」に反応していたこと、「握る」ことに興味を持っていたことから、2回目の交流会では、前回と同様音が鳴るおもちゃを準備することとした。その際、鉄琴のように『握った』撥で叩き『音を出す』おもちゃを加えるなど1回目での様子を生かし、さらに複数の音の鳴るおもちゃを準備することにした。2回目の交流会では、保護者から「絵本への興味が出てきたが口に入れたり破ってしまう」という話を聞いたため、安全面を考慮して布絵本を作成した。また、音の鳴るおもちゃには変わらず興味を示していたことから、音に違いを持たせたペットボトルのマラカスの作成を行った。

以上のように、グループごとで実際の子どもの遊ぶ姿や保護者の話から何をどれだけ準備するのかという細かな計画を行い実践した。

交流会の中では保護者に対して、質問をすることも行った。家庭での親子の様子、出産の話、子育てについてなど学生達がそれぞれのグループごとで質問を考え保護者の方に尋ねるといった形をとった。

### 3. 質問紙調査の実施

#### 1) 質問調査の内容

受講学生に対して、3回目の交流会実施後にアンケート調査を行い、交流会を通しての学びや自分自身の変化等について自由記述を求めた。

本調査については、中部学院大学・中部学院大学短期大学部倫理委員会の承認を得て実施した。学生にはアンケートの実施前に任意による参加であること、得られた内容については公表すること、個人を特定する記述をしないことなどの説明を行った上で同意を得た。

受講学生93名にアンケート調査を実施し、記述がなされていた83名の記述について分析を行っていく。

#### 2) 結果と考察

学生の自由記述の内容は学びの対象という観点から「保護者」「子ども」「自分自身」という3つに分類することができた。さらに細かく内容を分類すると「保護者」については、子どもを育てる上での保護者の苦労や普段どのようなことに配慮しているのかという内容が含まれた「育児の大変さ・配慮」と実際に保護者と接したことで分かった保護者の姿や子どもとの関わり方についての内容が含まれた「保護者の在り方」の2つの観点で分類ができた。「子ども」については、子どもの発達理解についての内容が含まれた「子どもの発達」という観点のみであった。「自分自身」については、交流時における乳幼児親子に対する自分の言動・姿勢について言及している「関わり方」、交流の際の準備物や環境について言及している「環境構成」、子どもに対する感情や思考の変化に言及している「子どもに対する思い」、今後保育者としてどうありたいかに言及しており、「保育」や「保育者」という言葉が明記されているものを「保育者としての姿」とし、4つの観点で分類した。それぞれの観定の記述延べ人数は、保護者に対する学びや感想を記述した人数は17名(そのうち、「育児の大変さや配慮」は8名、「保護者の在り方」は9名)、子どもに対する学びや感想を記述した人数は30名、自分自身の学びや感想を記述したのは60名(そのうち、「関わり方」は42名、「環境構成」は10名、「子どもに対する思い」は6名、「保育者としての姿」は2名)であった。アンケート調査の分類結果については表3に示した。

アンケートの中で最も多くの学生が記述したのが自分自身について言及したものであった。その中でも乳幼児親子とどのように関わったのかという「関わり方」についての記述が多く見られた。学生は、今回の交流会の期間中に保育実習を行っている。大人数の子どもに対応する実習と1・2組の親子と数名の学生とで関わる交流会とでは、状況が異なるため関わり方が変わってくる。保護者がいる前で子どもと関わる機会もあまりなかったため、緊張感を感じた学生も多かった。しかしながら、1回きりで終わる体験ではなく、3回の継続的な同一親子との交流を通して一人の子ども・保護者と丁寧に関わることの難しさと共にとその重要さを感じたのではないかと考える。

表3 学生による自由記述の分類

対象	内容	記述例	記述人数
保護者	育児の大変さ・配慮	・お母さんの大変さが分かった ・保護者が子育ての中で気をつけていることが分かった	8
	保護者の在り方	・子どもとの関わり方を見て納得できることや新たな発見もあった ・保護者は子どものちょっとした変化に気づくことができることがわかった	9
子ども	子どもの発達	・数ヶ月でどう子どもが成長していくのかを比較しながら学べた ・1歳児の子が何をしたら喜ぶのか理解できるようになった	30
自分自身	関わり方	・徐々に積極的に関わるできるようになった ・保護者の方の悩みを会話から拾うことの大切さが分かった	42
	環境構成	・どうしたら楽しいと思える遊びができるのかを考えるようになった ・年齢にあわせた遊びを考えることができた	10
	子どもに対する思い	・子どもの成長に喜びを感じるようになった ・もっと子どものためにどのようなことができるのか考えるようになった	6
	保育者としての姿	・保護者をしっかり支援していける保育者にならないといけないと思った ・保護者目線で保育を考えることも大切だと思った	2

成田(2012)によると、保育士経験が5年くらいまでは保護者対応にも余裕がなく、自己のコミュニケーション力が気になること、経験をつんでいくと保護者に対して気になる点が出てくることを示している。本調査の中でも、保育者を志している学生が乳幼児親子との中で自己の関わり方に関する言及を多くしていたという結果とも合致していると言えよう。保育現場に出る前に保護者との交流し、保護者の思いを聞くことによって、自己の姿を見直すとともに、保護者理解への意識が高まるきっかけになったのではないかと考える。

次いで多くの記述が見られたのは子どもについて言及したものである。内容を詳細に見てみると、子どもの成長の早さについての驚きが学生の中にはあったようである。未満児との交流ということで、身体的な発達も著しい年齢であり成長について理解しやすかったと考えられる。また、未満児との関わりが可能な保育実習は2週間という期間しかないため、今回の交流のように1ヶ月に1度、3ヶ月間に渡って継続的に子どもの姿を見ることができたことは学生にとって子どもの発達を実感するには大きな意味があったと言える。

また、子ども自身に対する理解ではないが、学生自身が子どもに対する思いや感情の変化に言及する学生も6名いる。継続的な関わりだからこそ感じられる子どもの成長の喜びや子どもに対する愛情が学

生達の中に育まれていったといえる。そして、成長していく子どもの姿を保護者と共に喜び合う時間をもてたことでさらに親子との関係が築かれることにつながったのではないだろうか。

保護者について言及した人数は17名と残り2つの観点と比較すると少ない。しかしながら、これまで保護者と関わる事がなかった学生達にとっては、親子が家庭の中でどのように過ごしており、保護者がどのような思いで子育てをしているのかを理解することができる場になったと考える。だからこそ、「今」の自分自身についてだけでなく将来の保育者としての自分の姿について言及する学生が存在していたのであろう。

保護者の子育てにおける苦労や工夫を知ることだけでなく、「保護者の在り方」という保護者目線を見た時の子どもの姿を理解すること、保護者の子どもへの関わりからの学びがあった。森田・藤井(2012)では、幼児期の子どもの姿について気づきやすさについて検討したところ、保育者の気づきやすさよりも保護者の気づきやすさの方が得点が高いケースが多く見られたとしている。今回交流した子どもは未満児であり一日保護者と過ごしている子が多い。そのため、保護者だからこそ気づく子どもの姿があると推測される。この時期の子どもについて保護者がどのように子どもを捉えているのかということを経験が学ぶ機会となり、新たな視点を獲得こ

とができたと考える。保護者の姿を通して、子どもについての理解を深めることもできたといえよう。

「環境構成」に言及する学生がいたことも興味深い。2回の交流の中で見えてきた子どもの姿から、3回目の交流会では子どもに合わせて玩具を考え作成することを行った。実習においては、既に担任が設定した保育室の中での実習が行われるため、部分実習における環境構成を考えることがあっても、学生自身が保育室の普段の環境構成を考え、見直す経験ということはいない。交流を通して、一回一回の交流会という場がどのような環境であれば子どもが楽しい時間を過ごす事ができるのかを考え、実践することの重要性を実感したといえる。また、子どもだけでなく保護者にも楽しんでもらえる空間にできるように考える学生もおり、親子のための環境を考える姿勢で取り組むことができた。合同タイムでも年齢の異なる子ども達が楽しめる遊びを提供する必要があったことから、仲間とともに考え練習するといった事前の準備が必要であった。保護者と子どもの前に立って遊びを提供することも環境について考え取り組むきっかけになっていたといえる。

玩具の選択においても未満児との関わりのため玩具の1つとっても『今』の発達に合ったものか、あるいは材料として安全性はどうかなど様々な側面から考えていた。子ども理解を通しての環境構成という感覚を実感したといえる。

#### 4. まとめ

保護者や子どもとの直接的な関わりを通して、保護者理解・子ども理解を深め、人との関係形成の在り方を実感する場として本実践を行った。3回の交流を通しての学生の学びは3つあった。1つ目は、育児の悩み・苦勞・喜びといった保護者の思いを知るといふ保護者理解への意識が高まったことである。2つ目は、未満児の子どもとじっくりと関わることによって子どもの発達について理解を深めることができたことである。実際の子どもの姿や保護者の視点から見た子どもについての話を聞くことで子どもに対する理解が深まり、新しい視点から子どもを捉えることができたといえる。自分自身の在り方を見つめることができたことは3つ目の学びとして挙げられる。特に、3つ目の自分自身の姿を振り返

る場となったことは、課題を見出し次に向かう意欲へとつながったと言える。主体的に学生が学ぼうとする意欲が保育実践力を身につける上では不可欠であるため、その一端を担うことができたのではないかと考える。

今後の課題としては本実践においては、前期の授業の3回の交流会であったが、1年を通して親子と関わりをもつことによって、子どもの成長だけでなく、保護者の心情の変化を理解すること、さらに保護者との関係を形成する経験をすることができると考える。直接的な関わりが積み重ねが保育者としての「人と関わる」ことの自信へとつながっていくであろう。

また、乳幼児と母親を対象とした実践活動が多い中、新山ら(2016)は家族で参加する遊びの場を提供しており、祖父母の参加も見られている。保育者の保護者理解という観点から考えると、母親の立場や思いだけでなく父親の立場や思いの理解も保育者にとっては必要になってくる。また、子どもを取り巻く人間関係といえば、父母だけでなく兄弟や祖父母の存在もある。家族を対象とした交流の場があることによって、様々な家庭の様子を理解するとともに保育者として様々な人と関わる力を養成することも必要になってくると考える。

#### 引用文献

- 厚生労働省(2018) 保育所保育指針. 平成29年3月31日告示
- 藤井 伊津子・高田 康史・雲津 英子・秀真一郎・栗田 喜勝(2018) 地域アウトリーチ型子育て支援活動が親子関係に及ぼす影響-学生主導による親子ふれあい遊びの実践を通じて-. 吉備国際大学研究紀要, 第28号, 115-129.
- 真下 知子・張 貞京・中村 博幸(2010) 保育者-保護者間のコミュニケーションの改善をめざした研究-保育者に必要な能力・資質に関する幼児教育学科学生の意識-. 49, 116-128.
- 文部科学省(2018) 幼稚園教育要領. 平成29年3月31日告示
- 森田 愛子・藤井 真衣(2012) 幼児の発達への保護者と保育者の気づき. 広島大学心理学研究, 第12号, 269-277.

内閣府（2019）令和元年版 子供・若者白書. 日経印刷株式会社 pp194.

内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）幼保連携型認定子ども園教育・保育要領. 平成29年3月31日告示

中平 絢子・馬場 訓子・高橋 敏之（2014）信頼関係を構築する保育所保育士の保護者支援. 岡山大学教師教育開発センター紀要, 第4巻, 63-71.

成田 朋子（2012）保護者対応に求められる保育者のコミュニケーション力. 名古屋柳城短期大学研究紀要, 第34号, 65-76.

橘 知里・小原 敏郎（2014）保育者の子育て支援

力の養成に関する研究－養成段から意からの学びの連続性に着目して－ 日本家政学会誌, 第65巻(8), 415-422.

矢萩 恭子（2014）2歳児保育室「あそびば『ぽこあ』」における成果と課題～保育実践力と子育て支援の相互機能の側面から～. 田園調布学園大学紀要, 第8号, 79-102.

吉田 美奈・長槽 涼子（2017）どんぐり広場における学生の保育実践と学び. 上田女子短期大学紀要, 第40号, 23-32.

和田 幸子（2017）子育て交流会を通じた学生の学び. 京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要, 第55号, 245-252.